

よろずは

平成二八年
十二月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

十二月には

沫雪降ると

知らねかも

梅の花咲く

含めらずして

万葉集 卷八―一六四八 紀少鹿女郎

【訳】

冬十二月にはまだ沫雪が降るとは知らないからか、
はやばやと梅の花が咲くことだ。
つぼみのままでいいないで。

この歌は『万葉集』の中で唯一「十二月」と詠まれた歌です。早咲きの品種があるとはいっても、十二月に梅の花が咲くとは早過ぎるよう
に感じられます。この歌でも、まだ「沫雪」が降る「十二月」に早々と
咲いた梅の花への興味が表現されています。

「十二月」は古い写本でも「しはす」と訓読されていますが、語源は
よくわかっていません。平安時代の辞書『色葉字類抄』には、師馳
すという説が紹介されていますが、むしろ「しはす」の発音が先にあつ
て、漢字をあてはめたことで生まれた俗説だと考えられています。

古代中国の歴史書である『三國志』の『魏志』にある東夷伝倭人条
には、日本列島に住む人々は四季の概念を知らない、と書かれています。
一年を十二ヶ月や四季としてとらえる概念は、七世紀頃に日本に導入さ
れたとみられています。

当時の暦は現代日本で使用されている暦とは異なっていて、季節感に
もずれがあります。当時の十二月は現代の暦でいう一月頃に相当し、こ
の歌は早春の梅の開花を詠んだ歌であつたとみられます。

もともと梅は外来の植物でした。奈良時代には、中国文学の影響を受
けて、白梅と雪とを取り合わせて表現する詩歌が作られています。この
歌は、そうした「梅」と、暦の知識に基づいた「十二月」とを組み合わ
せた、当時としては斬新な、大伴家持とも親交のあつた紀少鹿女
郎らしい知的な歌だつたといえそうです。

【万葉古代学係】